

山脇百合子先生を偲んで

木村 晶子

ご逝去のお知らせを受けてからかなりの時が経ちましたが、改めて山脇百合子先生の存在の大きさを痛感しています。日本の社会が激しく変化した時代に、先生が常に女性研究者としてパイオニアでいらしたこと、限らない情熱によって国内のギaskell研究の礎を築き、発展させたことに尊敬の念が深まるばかりです。

初めて山脇先生とお会いしたのはもう40年あまり前の私の大学時代のことで、先生が非常勤講師として「イギリス小説」のご講義をなさっていた早稲田大学第一文学部の教室でした。女性作家を中心にした授業で、アフラ・ベーンから始まってオースティン、ブロンテ姉妹、エリオット、マンスフィールドなどの紹介と作品の概要が語られ、確かウルフが最後でした。なかでもギaskell（当時はまだギaskell夫人という呼称でした）については、とても熱心にお話をなさり、私がギaskellの名を初めて知ったのもこの時でした。先生は、ご本務校の実践女子大学で「英国女流作家論」という講義を担当することになって女性作家研究に目覚めたと、『エリザベス・ギaskell研究』（北星堂書店、1976）のあとがきに書いていらっしゃる。ご著書の『英国女流作家論』（北星堂書店、1978）は、まだ日本の英文学界にフェミニズム批評が存在しなかった時代の出版だったことを思うと、ご研究の意義の深さがよくわかります。

当時は学生運動の最後の頃で、早稲田では校門に機動隊や装甲車が常駐し、構内では流血事件もあるという殺伐とした雰囲気でした。そんな中で、山脇先生のあの優しく上品な語り口のご講義によって、遙か彼方の空間と時間の文学への憧れを強くしたのを思い出します。扉を開けて、秘密の花園の存在を知らせてくださったような気がしました。この講義によってウルフを集中して読むようになり、大学院時代の研究につながりました。ところがその後は、博士課程に進学しながらも家事や育児に追われ、研究を細々と続けているというより、辞めてはいないという状態でしかありませんでした。そんな時期にたまたま読み始めたギaskellの作品について書いた紀要論文に鈴江璋子先生が目をとめて下さり、ギ

スケル協会に入会を勧めて下さったのが、長く続く協会とのご縁の始まりとなりました。

初期の日本ギヤスケル協会は、小池滋先生が副会長で、実践女子大学の山脇先生の教え子の方たちも多く、山脇先生の学識と人望ゆえに集まった学会という、和やかな雰囲気のものでした。年齢のことを言うべきではないかもしれませんが、今回の訃報を受けて、協会創成期からすでに山脇先生が70代でいらしたことを知り、驚きを禁じ得ませんでした。多人数の学部授業では山脇先生とお話する機会もありませんでした。協会ではいつも親しくお声をかけてくださいました。20年ほど前に私が英国のギヤスケル協会に参加したときにもいろいろお話できましたが、先生はゆったりと穏やかでありながらも澁刺として、才気あふれる様子でした。

残念ながら先生は令和時代を見ずに旅立たれましたが、志渡岡理恵先生のご尽力によって、今秋の大会を実践女子大学で開催させていただけることとなり、それが少しでも先生の追悼になればと思います。学問的なことばかりではなく、山脇先生には常に精神のみずみずしさを失わないことの大切さを教えていただきました。感謝と共に、心からご冥福をお祈りいたします。

(日本ギヤスケル協会第5代会長、早稲田大学教授)